

入学試験問題

国語

試験時間 50分

注意

- 一、指示があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- 二、答えは、解答题紙に記入してください。問題は、 から まであります。
- 三、試験監督の先生の指示に従って、試験を開始してください。
- 四、試験の途中で、トイレに行きたくなったり、気分が悪くなったりした場合は、手をあげて試験監督の先生の指示を受けてください。
- 五、試験開始の指示があったから、解答题紙に「氏名」「受験番号」を記入してください。
- 六、解答题紙には、解答以外を記入しないでください。
- 七、試験が早く終わっても、周囲を見回したり、横を向いたりしてはいけません。試験監督の先生から注意を受けることがあります。
- 八、机の上には、筆記用具以外は置いてはいけません。風邪などにより、ティッシュペーパーを使用したい場合は、予め試験監督の先生に申し出てください。
- 九、本文の中からぬき出す場合は、句読点や「」等の符号も一字として数えなさい。
- 十、本文中の*は、本文の後ろに意味の説明があるという印です。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今の時代、社会そのものなかに聞く力を低下させるような要因が多数存在している。主な要因を三つあげよう。第一の要因は、今、急速変化の時代だということである。情報、道具、制度など、あらゆるものが日々刻々と目まぐるしく変化する。その変化の速度は、歴史上かつてなかった速さであり、また加速度的に速さを増している。私たちは、それについていくだけで精一杯。人とのコミュニケーションも、次々とこなしていかなければならず、人の話を落ち着いてきちんと聞いている余裕などない。ただ表面をかすめ取るように聞くだけである。こうして、人の話をきちんと受け止めて聞く力は弱くなる。

第二の要因は、今日の社会における情報の洪水である。次々と大量の情報が押し寄せてくる。それにより、個々の情報の価値は低下する。そこで、それらをきちんと受信しようとしなくなる。聞くことさえ、きちんと聞くこととしないくなるのだ。

例えば、テレビの天気予報。どのチャンネルでも、一日に何度も天気予報を流している。しかもその内容は盛りだくさんだ。そんなに頻りに放送されなかったときに比べ、一回々々の天気予報の価値は確実に低くなっている。聞き逃しても、すぐに別のがあるからである。したがって、私たちはごくいいかげんにしか聞かなくなる。他のことについてもこういういった聞き方をしていけば、聞く力はやはり低下していく。

そして第三の要因は、コミュニケーション機器の著しい発達と普及だ。今、人の集まる場所、至るところでマイクが使われる。これくらいの人数ならマイクは要らない、こんな部屋ならマイクは必要ないというときにも、使われる。マイクの濫用・誤用である。しかも過剰な音量での使用が目立つ。その結果、人々は聞く努力をするということをしなくなってしまった。その証拠に、^aニクセイでも十分聞こえるだろうと判断してマイクなしで話したりすると、マイクを使ってくれと要求される。^bシマツである。

I

の放棄と大きな音量への依存は、まちがいに聞こえる。

携帯音楽プレーヤーが恐るべき進化をとげた。すごく小型化された機器に膨大な量の音楽をシユウロクして持ち歩き、自分の好みの音楽をいつでもどこでも高音質で聞けるようになった。どこへ行くにも、ほとんどいつもそれを使用するという人もめずらしくない。大音量での常用が聴力を低下させるということもあるが、それ以外の弊害もある。

携帯音楽プレーヤーで音楽を常時かけているとき、それは聞くというよりは音を耳から流し込んでいるのである。けっして、注意を向けて聞いているのではない。これもやはり、聞く力の低下につながる。

そして、^①携帯電話。これさえあれば、いつでもどこでも、好きな相手と、あるいは仕事などで必要な相手と、つながることができる。周りに人がいても、事実上いないのと同じである。つまり、携帯電話という道具は、限られた相手とのコミュニケーションを促進する一方で、それ以外の人々とのコミュニケーションの機会をなくしてしまうような性質を持つ道具なのだ。限られた相手だけとのコミュニケーションに明け暮れていけば、^A必然的に、多様な人々とコミュニケーションを取り結ぶ力、そして多様な人々の話を聞く力は衰えることになる。

急速変化、^②情報の洪水、コミュニケーション機器の著しい発達・普及——。これらは、今日の社会の最大の特徴と言つてよい。誰でもその影響から逃れるわけにはいかない。そして、これらがあつてもすれば聞く力を低下させるように働くのだから、現代人の聞く力が低下してしまつてきている可能性は、けっして否定できないのである。

現代人の聞く力の低下を物語る社会・ゲンシヨウとして注目しておきたいものに、カウンセリング・ブームがある。カウンセリングと一口に言つても、実際にはさまざまなアプローチがあるが、今の日本での主流は、アメリカの心理学者カール・ロジャーズの流れをくむカウンセリングである。この流派のカウンセリングでは、カウンセラーは聞き手の役割を演じる。悩みや問題を抱えた人の話を聞く——それがカウンセラーの主な仕事である。いわばカウンセラーは、「職業的聞き手」である。

カウンセリング・ブームは、「職業的聞き手」への^日需要の著しい高まりを意味する。では、なぜこつても職業的聞き手が必要とされるようになったかである。

その理由としては、悩みや問題を抱えた人が増えたからと考えるのが普通だろう。ストレス社会などと呼ばれる今日、^③心が傷つき、悩み、問題を抱える人が増えている。そこで、そういった人たちの心の傷を癒し、悩みや問題の解決を手助けする専門家であるカウンセラーの必要性が高まつたのである。

しかし、このことは全面的には否定できないにしても、^{II}、それだけだろうか？
人々が人の話をあまり聞かなくなった、聞けなくなった。そのために、その代わりをつとめる職業的聞き手が必要になった——こういう面も多分にあると私は考えている。

かつては、傷つき、悩み、問題を抱えた人がいても、家族や友人や仲間など本人の普段の人間関係のなかに、話を聞いて手助けをする人がいた。^{III}、家族や友人などの関係では、相手の話を聞くというのは当たり前に行つてあつた。悩みや問題を家族や友人に話す。家族であれば、仮に普段はあまり口をきかない家族であつたとしても、それを聞いてやる。あるいは、本当の友だちであればもちろん、聞く。悩みや問題を幾分かでも。セオつてやればとの思ひで、聞くのである。それこそが、家族であり、友人であり、あるいは仲間であつた。

しかし、それが^{IV}、そうではなくなつてしまつた。さまざまな社会的要因の影響を受けて、人々の聞く力は低下した。家族や友人や仲間の話であつても、それをきちんと聞くことができなくなつた。明るく楽しく軽いことならまだしも、悩みや問題などという重くやっかいな話は、聞いてやる余裕もその力もなくなつてしまつたのである。そのため、職業的聞き手が必要とするようになった——そう考えられるのである。

^V、^{*}臨床心理学者・臨床心理実践家たちが、職業的領分拡大をもくろんでか、心の問題は自分たち「心の専門家」にまかせたほうがいいというキャンペーンを展開する。それが以上のような社会の側の事情と相まって、カウンセリング・ブームが起つた。

つまり、確かに今日の社会において、心が傷ついたり、悩みや問題を抱えた人が増えたということもあるだろうが、しかし、それだけでカウンセリングがブームになるとは考えにくい。それには、やはり人々の聞く力の低下が大きな要因として関わつていてと考えられるのである。

▼ 誰かが何か問題を起こす。あるいは問題を抱える。それを普段の人間関係のなかでどうにかするということをせず
に、即、カウンセラーにまかせてしまう——。カウンセリング・ブームのもと、こういった「^④コミュニケーション
の手抜き」が広がっている。

こんなケースがあった。学内で窃盗を犯した学生が、カウンセラーのところへ通わされる。何度か通ううちに、そ
の学生はカウンセラーにこう言ったという。「はじめて心を聞いて語ることができた、はじめてちゃんと聞いてもら
えた、信頼できるのはカウンセラーの先生だけです」と。

心を聞いて話せ、ちゃんと聞いてもらえ、そして信頼できるのは、普段の人間関係の圏外にいるカウンセラーとい
う第三者だけ——。これはいったい、どういうことなのだろう？ こんな社会であっていいのたろうか？ 心を聞いて
話せない、話をちゃんと聞いてもらえない、そしておたがいに信頼できないような、そんな人間関係のなかでしか
生きられないことこそが、心の問題を生み出すものになっているのではないだろうか？

かつては、多分、普通の生活環境の中で普通の生活を送っていたら、社会生活に必要な聞く力が^⑤自然に身につ
たのではないかと思われる。今のように変化の急なテンポの速い生活ではなく、もっとゆったりした生活が送れたこ
ろである。そして、しつけということもきちんとなされていて、そのなかでたいの人が社会生活上必要となるマ
ナーやコミュニケーション能力を身につけていた。人の話をきちんと聞く能力も、そういった人間形成総体の一環と
して形成されていたと考えられるのである。

しかし、時代は変わった。マナーもコミュニケーション能力も、そして聞く力も、自然にまかせていたら育たない
という時代になってしまった。今は、それらを意識的に努力して身につけさせ、また、身につける時代なのである。

(伊藤進「聞く力」を鍛える)より ※問題作成の都合上、本文を一部省略しています。

【語注】

臨床心理学者 Ⅱ 実際に患者に接して、精神的な病の診断や治療をする医者。

問一 —— 線部A「必然」の対義語を次から選び、記号で答えなさい。また、—— 線部B「需要」の対義語を漢字で答え
なさい。

ア 自然 イ 平然 ウ 偶然 エ 公然 オ 整然

問二 —— I にはまる言葉を本文中から五字以内でぬき出しなさい。

問三 —— II Ⅴ にはまる言葉の組み合わせとして最適なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 必ず ———— けれども ———— けつして ———— まさに ———— イ どうとう ———— もともと ———— 必ずしも ———— けし
ウ しかし ———— けれども ———— どうやら ———— ちようど ———— エ はたして ———— そもそも ———— 必ずしも ———— 折しも
オ はてさて ———— 元来 ———— おそらく ———— なぜなら

問四 —— 線部①「携帯電話」は何を低下させると述べていますか。筆者の主張をふまえて、本文中から最適な部分をと
らえ、初めと終わりの五字を答えなさい。

問五 —— 線部②「情報の洪水」が私たちにおよびす影響を、本文中の語句を用いて、五十字以上七十五字以内で説明し
なさい。

問六 —— 線部③「心が傷つきく増えている」とありますが、どんなことが、その問題を生み出すものになっていると述
べていますか。最適な一文を本文中の▼印より後からとらえ、その初めの八字を答えなさい。

問七 —— 線部④「コミュニケーションの手抜き」とはどういうことですか。最適なものを次から選び、記号で答えなさい。
い。

ア 普段の人間関係のなかで相談しても解決できない問題や悩みを、専門家であるカウンセラーに相談して解決しよ
うとすること。

イ 悩みを抱えている家族や友人の悩みを自分で聞いて手助けをしようとするのではなく、初めからカウンセラーに
まかせてしまうこと。

ウ 悩みを抱えている人へのアドバイスの方法をカウンセラーに教えてもらい、教わったとおりのことを、悩んでい

る人に伝えようとする事。

エ さまざまな社会的要因を受けて、人々の聞く力が低下したため、家族や友人の悩みであつてもきちんと言ふことができなくなった事。

オ 「職業的聞き手」であるカウンセラーが、心の問題は自分たち「心の専門家」にまかせたほうがいいというキャンペーンを展開した事。

問八 —— 線部⑤「自然に」と対照的な意味で用いられている言葉を、本文中から四字でぬき出しなさい。

問九 ……線部「こんな社会であつていいのだからか」とありますが、筆者はどんな社会であるべきだと考えていますか。本文の内容をふまえて、「社会であるべきだ」に続く形で七十字以内で説明しなさい。

問十 本文の内容の説明としてふさわしくないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 心の悩みを抱える人がふえると予想した臨床心理学者が、心の問題は「心の専門家」にまかせるといふキャンペーンを展開したことによってカウンセリング・ブームが起こった。

イ 私たちの聞く力を低下させる、主な社会的要因として「情報や制度などの加速度的な変化・情報の洪水・コミュニケーション機器の著しい発達と普及」があげられる。

ウ かつては、社会生活に必要なコミュニケーション能力や聞く力は、普通の生活環境のなかで自然に育てられたが、現在は努力して身につけさせなくてはならない時代になった。

エ 社会の急速な変化や情報の洪水などの影響から逃れることは難しいが、できるだけそれらにふれることを避け、主体的な生活をするように心がけることが大切だ。

オ 携帯音楽プレーヤーを常時大音量で聞くことは、聴力を低下させることにつながるばかりでなく、聞く力を低下させる一因となる。

問十一 —— 線部 a s e のカタカナを漢字に直しなさい。

二 「祖母の三回忌の法要が十一月三日に行われる」という電話を叔父から受けた場面」に続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「悠也のこと、どう話すかなあ」

母の言葉に關係の ^Aないところで父がつぶやいた。

「正直に言えば？ いなくなりましたって」

あたしの言葉に母の眉が ^{まゆ}つり上がった。本当はもう一言言つてもよかつたかな。親の圧力が息苦しくて逃げたんだ、とか何とか。

「よけいな心配かけられないでしよう」

① そうじゃなくて世間体 ^{てい}だろう、と言いたい気持ち ^{おき}をどうにか抑える。つまらない衝突 ^{しょうとつ}したって、エネルギーの無駄なのに、やっぱり、悠ちゃんのことになると、あたしは冷静さを欠く。

「文化の日の法要か」

父がつぶやく。文化の日？

「命日、六日じゃん」

「平日にやるわけにいかないでしょ。去年だつて」

去年なんて、大昔だ。だって、^②あの頃とは違 ^{ちが}うのだから、うちは。だけど文化の日って十一月三日？ コンテス

トの日じゃないか。

「だめ。あたしその日用品がある。行けないから」

「何バカなこと言つてるの！」

母が金切り声をあげた。久しぶりに聞く声だ。

兄の家出騒動のほとぼりが冷めてから、我が家は低レベル安定って感じの状態が続いていた。以前の母は、ふだんはわりと冷静で感情的になつたりはしないタイプだけど、時々発作的に声を荒らげることがあった。一年前、悠ちゃんがバイクの免許を取ると言った時もそうだった。最初のうちは、両親とも、静かに **A** ように翻意を促していた。珍しく抗った悠ちゃんに、父親もいつになく威圧的になった。自主性は重んじるが、バイクはだめだと言う父に、言うことが矛盾している、法律でだって認めているんだ、と悠ちゃんが怒鳴った。リビングの椅子をけつとばして、テーブルの上に置かれた食器が落ちて皿が二枚割れた。父親は一瞬、手を振り上げそうになったけど、母が「やめて！ 謝りなさい、悠也」と、金切り声をあげた。それを見たあたしは、妙に冷静に、似たもの夫婦だな、なんて思ったつけ。自主性と口にしなから、物わかりのいいふりをしながら、結局は自分の価値観で縛ろうとする。

③ 粹を踏み外すことは認めない。父も母も同じだった。

思えば、バイクの免許を取りたいと言った頃から、悠ちゃんには、限界が来てたのかもしれない。あの日以降、二度と怒りを露にすることはなかった。ただ時々、**B** やりきれないって顔で遠くを見ていた。その顔が痛ましかった。

「落ち着け」

と、父が声をかける。

「だって、この子ったら、こつちが我慢して何も言わないのいいことに好き勝手なことばかり。いくら悠也のことがあったって」

何を言ってるんだらう、この人は。あたしはまじまじと母を見た。あたしのことを悠ちゃんのせいにはしてほしくない。だいいち、あたしがいつ好き勝手なことをしたというのだらう。あたしの日常はその日の前も後もほとんど変わらない。時々、**C** ダッチの練習に出かけるほかは。それだって週に二、三度のことでしかないのに。

「とにかく、あたしその日、だめだから」

「朋花！ ちょっとこつち来て座りなさい」

うざいなあと思いながら、あたしは逆らわなかった。火に **B** を注いでもしかたない。その時はそう思ったのだ。でも、結局燃え上がるしかなかったのだ。④ 火はずっとくすぶり続けていたのだから。

「あんたね」

母の声は冷静さを取り戻しているかに見えた。

「法事は家の行事なの。行かないなんて勝手は許しません。これまで、あんたの自主性を重んじて、干渉はしないようにしてきたつもりだけど、家族として果たさなければならぬ **C** があるの。それに、悠也があんなことになって、そのうえ朋花まで行かなかつたら、どう思われるか、少し考えたらわかるでしょう」

自主性、自主性って耳タコだ。だけどあたしの自主性は、いつ、どこで、発揮されるのだらう。

「つまり、世間体が悪いってこと？」

「そういうことを言っているんじゃないでしょう」

「そういうことにしか聞こえないけど」

「朋花」

と、父が口を挟んだ。

「三日の日、おまえは何の用事があるんだ？」

「先約がある」

「だれと？」

「友だちと」

「友だちってだれ？」

聞いたのは、母だった。少し嫌な感じがした。そして、その嫌な予感はいたいい当たる。

「そこまで言う必要ないでしょ」

「朋花、わたしたちはあんたの親で、つまり保護者なの。そのこと、わかるわね。あんたはまだ何でも好き勝手にや

れる年齢に達してないのよ」

「だったら、四六時中見張りでもしてれば。そうしたら、悠ちゃんも逃げられなかったかもね」
母の目が二センチぐらいつり上がった。

「そうね。そうすれば、あんたも妙なところに入ったりして、妙な子たちとつきあうこともなかったでしょう」
「何、それ」

たぶんあたしは一瞬にして理解した。妙なところがどこで、妙な子がだれなのかを。そしてその時になって、母は自分の言い草に気づく。 magari なりに職業は教師だ。教師としてあるまじき発言だったことを、* * * 端なくも露呈してしまったわけだ。それがこの人の本音なのだ。だけど、それを一瞬にしてわかる自分というのも、どこかで母の尺度を採用してることになる。あたしは母を睨めつけた。まるで、そうすることで母の尺度を免れる、と己を D ように。

「おい、妙なところって、朋花、おまえどこにいたんだ」

頓珍漢な父の割り込みが入る。あたしが黙っていたので、父は母のほうに顔を向けた。

「ご親切にも忠告してくれる人がいるのよ。のぞみが丘公園の先の、あやしげな喫茶店で、お嬢さん見かけましたわよ、って」

母が E ように父に説明した。いつかケーキを食べていたおばさんたちの姿が脳裏に浮かんだ。そういえば、あの中の一人がいぶかしげにこっちを見てた。知らない顔だったけれど、もしかして、あれはあたしを見ていたのだろうか。

「あのあたりに、そんなおかしな店、あったか」

しずくは普通の喫茶店だ。ただ、紅茶がメインというだけの。でも、あたしは何も言わない。

「不良っぽい子が入りしてる店だそうよ」

そう。不良っぽい玲奈が。だけど、不良じゃない。

あたしは立ち上がった。

「出かけてくる」

「どこへ行くの。話は終わってないわよ」

答えずに出ていこうとすると、後ろで母が、

「朋花！」

と大声を出し、父がなだめるように、声がでかいとかつぶやきながら、あたしの背中に向かって言った。

「行き先ぐらい、言っておけよ」

「妙な店。⑤とにかく、十一月三日はだめだから」

そう言い捨てて、リビングを出た。

雨雲がたれ込めている。今にも雨が降り出しそうだった。降るなら降れ、と乱暴な気分ですら降り出す。母の金切り声がまだ耳に残っていた。つられて大声を出さなかった自分を褒めてやりたい。あたしのほうが冷静だった。それなのに、やっぱり悔しい。何に対してかわからないけど、悔しい。

心の中の暴れ龍が叫びたがっているみたいだ。久しぶりに暴走した。前に行くチャリを、邪魔だ、とばかりにわざとすり寄ってから追い抜き、交差点では信号が変わる間に突っ込んでぶっ飛ばす。荒々しい気分です。毒づく一方で、不安もあった。法事に行かないという態度を、あたしは貫けるだろうか。もしもここで、あたしがだめになったら、コンテストはおじゃんだ。ダッチにはどうしたって三人必要なのだ。玖美と玲奈の顔が浮かんだ。もし、参加できなくなったら、何て言えればいいのだろうか。美咲が出ないと言っただけで、あんなにがっかりしていた玖美に、どんな顔で告げたらいいのだろうか。それより何より、あたし自身が出たかったのだ。

本当は、今日しずくに行く予定なんて、まったくなかった。考えもしなかった。家にいるのも気話まりだから、図書館にでも行くか、とは思っていた。しずくはあたしが行くところじゃない。玲奈たちにつれていってもらおうとこらだ。

でも、こうして走り出すと、自分が行く場所はおそしかないうような気がしてきました。

(濱野京子「フュージョン」より *問題作成の都合上、本文を一部省略しています。)

【語注】

翻意 〓 意志をひるがえすこと。気持ちを変えること。抗った 〓 抵抗した。逆らった。

ダッチ 〓 「ダブルダッチ」の略。縄を二本使って行う縄跳び。端なくも 〓 思いがけず。はからずも。

露呈 〓 よくない事柄が外に表れ出ること。睨めつけた 〓 睨みつけた チャリ 〓 自転車。

問一 〓 線部A「ない」と種類・性質が同じものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

A だれも聞いていないところへ話した。イ 情けないところを見せてしまった。

ウ その島には人は住んでいないそうだ。エ だれもその話を信じはしないだろう。

オ 味もそっけもない話だ。

問二 〓 線部B「やりきれない」の意味として最適なものを次から選び、記号で答えなさい。また、〓 線部C「四六時中」の意味を簡潔に答えなさい。

A やりとげることができない。イ 押し通すことができない。ウ がまんすることができない。

エ 従うことができない。オ 悲しみを消すことができない。

問三 A・D・E 〓 にはあてはまる言葉を次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

A ごまかす イ 鬼の首をとった ウ さげすむ エ 諭す オ 言い訳する

問四 B 〓 にはあてはまる言葉を漢字一字で答えなさい。また、C 〓 にはあてはまる「権利」の対義語を漢字で答えなさい。

問五 〓 線部①「そうじゃなくて世間体だろう」とありますが、母が世間体を気にしていることが明確に表れている一文を本文中からとらえ、その初めの五字を答えなさい。

問六 〓 線部②「あの頃とは違う」とありますが、違いの最大の原因はどんなことですか。十五字以内で答えなさい。

問七 〓 線部③「粹」と同じ意味で用いられている言葉を、本文中から六字でぬき出しなさい。

問八 〓 線部④「火はずっとくすぶり続けていた」についての説明として最適なものを次から選び、記号で答えなさい。

A 両親に対する反感や不満が心の中から消えず、きっかけがあれば表面化しそうな状態だった。

イ 両親が自分たちの考えを押し付けてきたときには、それに立ち向かう心の準備はできていた。

ウ 両親には逆らわないようにしようと思っていたが、反発を抑えることができない状態だった。

エ 自主性という言葉をちらつかせて考えを押し付ける両親に不満をぶつける機会を探っていた。

オ 子どもの気持ちを理解していると思いきや、いっている両親の態度への反発や不満が高まっていた。

問九 〓 線部⑤「とにかく、十一月三日はだめだから」と朋花が言うのは、その日に法事に行くとうなることを心配しているからですか。四十字以内で答えなさい。

問十 〓 線部「教師としてあるまじき発言」とありますが、「妙な子たちとつきあうこともなかったでしょう」という発言が教師としてあるまじき発言だと朋花が思ったのは、朋花が教師とはどうあるべきだと考えているからだと思いますか。次の文の【 】にはあてはまる内容を考えて文を完成させなさい。

・【 】が教師にとって一番大切なことだという考え。